

一二月九日 火曜日

「今日何をする」と聞かれて、あたしはすぐ「ルーブルに行きたい」と答えた。伯父が車で博物館まで送ってくれた。伯母は一緒に行くことを断り、あたしに自分で自分の問題を考える心の空間を与えてくれた。伯父は大の芸術愛好家だ。オルセー河岸に居を構えていて、外務省に近く仕事に便利だと言うが、レフト・バンク居住の芸術家のかもす雰囲気にはほれたのが本音らしい。ルーブルに行くのは天晴れだと褒めてくれたが、この日にかぎり、あたしは芸術鑑賞のために博物館に行くのではなかった。

胎児をおろしたいなら、山登りなどをし、普段しない重労働を試してみなさい、という記事をどこかで読んだことがある。今寒すぎて山登りはできない。ルーブルは二つの城を繋いで建てられた巨大な博物館だ。その中を歩けるだけ歩き回ってみよう。どんなに疲れても、歩き尽くすのだ。中に入った後、あたしはプランを早速実行に移した。サモトラケの勝利の女神ニケの彫像も、モナリザもあたしの眼中になかった。カトリーヌ・ド・メディシスが立てたという長い回廊が画廊になっている。そこを何度も回ってみた。階段を登り、階段を下り、疲れても休まず、歩きに歩いた。

メトロでアパートに帰ったのは七時すれすれ、伯母が示したディナーの時間だった。その晩調べてみたが、胎児はあたしから離れていなかった。

一二月一〇日 水曜日

伯母とシャンゼリゼーで買い物をし、素晴らしい首飾りをいただいた。ヘレン伯母さん、どうも有難う。ニューヨークから手紙がきていた。武彦からの返事だ。「おろしてくれるのか、よかった。これで君も僕も自由になる。ありがとう。」たったそれだけ、あたしの苦悩を全然理解していない。あんないやなやつに肌を許したあたしは大馬鹿者だった。彼の種をあたしの胎内にこれからもずっと宿させるのは真つ平御免だ。

一二月一日 木曜日

あたしは迷っている。一旦おろすと心に決めていながら、後で後悔するかもしれないよ、と言う伯母の言葉が気になって、どこかで、静かにその問題を考えて見たくなった。

正午過ぎにノートルダム大聖堂についた。祭壇の側のクアエアでミサが始まっていた。それに注意をはらわない観光客が多いが、あたしは信者の群れと一緒にミサに参加した。主祭壇とクアエアを区切る壁にキリストの生涯が描かれている。目の前にあったのは復活後あらわれたイエスの姿だったが、それが受難を

思わせ、それと比べるとあたしが抱えている問題は重要ではない、と自分の立場を客観的に見ることが出来た。それが契機となってあたしは一つの問題を解決することが出来た。昨日も今朝も、あたしは武彦の非人情を恨み、それがあたしの墮胎への決断を固めていた。しかしイエスの生涯を目の前にして、そんな恨みを持っている自分が狭小で、ごくつまらない人間に過ぎないことがよくわかった。武彦のことを棚上げにし、彼をなじるために墮胎をするのではなく、自分自身だけの問題としてそれを敢行できるだろうか、と考えてみた。伯母の「二〇年後に後悔することがないように」という言葉が急に新しい意味を持った。